

テステイモニー (証)
ジョーンズボロ アーカンソー州 アメリカ合衆国
1953年05月10日

1 こんばんは、皆さん。今夜またここに帰ってこられたことを心から光栄に思います。少し声がかすれています。しばらく説教をしていなかったのですが、ここ三、四晩ほどはかなり力を込めて語っていたので、少し喉を痛めてしまったようです。普段の集会では、私の代わりにマネージャーたちが話をし、私はただ病の方々のために祈るだけです。ですから、説教というのは私にとって少し新しいことなのです。私の話し方を見れば、それが慣れないことだと分かったかもしれませんね。ですが、私は心の底から主を愛しています。

今夜、主がこの小さな集まりの中に臨在し、皆さん一人ひとりに豊かな祝福を注いでくださるよう信じています。あなたも信じますか？——ええ、主は必ずなさいます。

さて、主はここにいるあなた方お一人お一人をすでにご存じです。私の目の前にいる方々の中で、顔を覚えているのはグローバー兄弟ご夫妻と、あちらに座っておられるお嬢さんだけのようです。しかし、神は皆さん全員をよくご存じです。あなたが生まれたその瞬間から、神はあなたを見守っておられました。あなたがこれまでに食べたすべての食べ物、吸い込んだ空気の一息一息——それらすべては神から与えられたものです。私たちが持っているすべてのものは、神から来たのです。

2 今夜はある特定の主題についてお話ししようと思っていたのですが、もし主の御心なら、明日の夜から再び「創世記」の一連のテーマに入っていきたいと思っています。

ですから、今夜はただ私自身の証を分かち合い、そして祈りの列を始めたいと思います。どうか神がこの時を祝福してくださるようにと願っています。今日の午後、私はずっと祈りの中にありました。ですから今は、癒しのために下っているこの油注ぎを手放したくはありません。少し聖書を読みたいと思います。ヨハネによる福音書第4章46節からです。

イエスは再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、かつて水をぶどう酒に変えられた場所であった。そこにカペナウムに病気の息子を持つ王の役人がいた。

その人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞いて、イエスのもとに行き、「どうか下ってきて、私の子を癒してください。もう死にかけているのです」と懇願した。

するとイエスは彼に言われた、「あなたがたは、しるしと不思議を見なければ、決して信じないのです。」

その役人は言った、「主よ、子どもが死なないうちに、どうか下ってください。」

イエスは彼に言われた、「帰りなさい。あなたの子は生きています。」その人は、イエスが言われた言葉を信じて帰って行った。

そして帰る途中、しもべたちが彼に出会って、「あなたの息子は生きています」と告げた。

彼はその時刻を尋ねた。「その子の熱が引いたのはいつか。」すると彼らは答えた、「昨日の七つ時(午後一時)に熱が引きました。」

それを聞いた父親は、イエスが「あなたの子は生きています」と言われたまさにその時刻であることを知り、彼自身も、その家族全体も信じた。

これは、イエスがユダヤからガリラヤに来られたときに行われた二度目のしるしであった。

——この御言葉を、今夜の私たちの心の中に深く刻みたいと思います。

3 では、しばらくの間、頭を垂れて祈りましょう。天のお父様、今夜、こうしてあなたの御名によって集められ、あなたの家にとともに居られることを感謝いたします。さきほど、あの部屋であなたのしもべが語ってくださった、あなたのなさった数々の素晴らしい御業を思い起こしながら、私たちの心は喜びで満たされています。なんと驚くべき恵みを、あなたはこの取るに足らぬしもべたちに与えてくださったことでしょうか。永遠のいのちを受け入れる特権を与えられ、今この地上を超えた彼方の国で、永遠に祝福される者とされたことを思うと、言葉にならぬ感謝が溢れます。御言葉にこうあります。

「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだこともないものを、神はご自分を愛する者たちのために備えておられる。」

今夜、この集まりにあなたの祝福を注いでください。このしもべは少し声がかすれておりますが、この弱さもまた、癒しの働きのためにあなたが備えられたことだと信じます。どうかここにいる一人ひとりを祝福してください。

そして、私たちが今夜この場所を後にするとき、エマオへの途上の弟子たちのように言えるようにしてください——

彼らは主と共に歩き、主と語り合っているながら、それが主だとは気づきませんでした。けれども主が御自身を現されたとき、彼らはこう言いました。

「道々、主が話して下さったとき、私たちの心は内に燃えていたではないか。」

今夜もまた、主よ、どうかそのように働いてください。

ここにいるすべての者が、復活の主イエス・キリストが、春のこの季節にも生きておられ、今まさに私たちのただ中におられることを悟ることができますように。死者の中からよみがえり、永遠に生きて、御自分の民のうちに宿り続け、ついには栄光の携挙の日に、ご自身の花嫁なる教会を迎えに来てくださる——その日まで、共におられるお方であることを、はっきりと示してください。

この祝福を、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

——今、この箇所を思い巡らしていると、一人の人のことが心に浮かびます。

彼はかつて、もしかすると、イエスにあまり心向けなかった人々の仲間にはいたのかもしれませんが。けれども、ある日、どうしても主の助けが必要となる時が来ました。息子が死の床に伏していたのです。彼は何とかしなければなりません。そこで彼はイエスのもとへ行きました。イエスは彼に言われました。

「あなたがたは、しるしを見なければ信じない。」しかしその人は反論しませんでした。ただ、こう言いました。「主よ、子どもが死なないうちに来てください。」

4 さて、皆さん、この箇所ですべて大切なことに注目してください。

この人は、イエスにご自分の家まで来ていただき、息子を癒してほしいと願いました。しかし、イエスは彼が求めたその「方法」で願いをかなえられませんでした。——これは、私たちにも同じように起こることです。

「祈りの列に並べばきっと癒される」「神がこのことをしてくださったら信じよう」——そう思うことがありますね。

けれども、主はいつも私たちの思う形では働かれないのです。

イエスはその人に、ただこう言われました。「あなたの子は生きている。」

そして聖書はこう記しています——「その人は、イエスが語られた御言葉を信じた。」もし彼が、その言葉を信じなかったらどうなっていたでしょうか。

結果はまったく違っていたはずですが。息子は死んでいたでしょう。

今日も同じです。神の御言葉を信じなければ、私たちも滅びます。

主はこう言われました。「だれでも、望む者は来なさい。」

けれども、その御言葉を信じなければ、罪の中で滅びてしまうのです。

癒しについても同じです。もしあなたが主の御言葉を信じないなら、病の中で、若くしてその命を終えることもあるでしょう。

けれども——もしあなたが、主の語られた御言葉を心から信じるなら、

あなたが願い求めるもの、主が約束されたものを、必ず受けることができます。

5 今朝も、たぶん今夜ここにおられる方々と同じ皆さんにお話ししましたね。

今夜はそれぞれの教会に出席していただくようお願いしておりました。

私は、誰かを自分のもとに引き寄せるために来たのではありません。

むしろ、明日の夜も再びお会いできることを願いつつ、

皆さんがそれぞれの「持ち場」、すなわちご自分の教会で忠実に仕えることを大切にしていきたいのです。

リード兄弟の思いも、決して他の教会から人を奪おうというものではありません。彼が求めているのは、教会に通っていない罪人たち——

まだ神の家を知らない人々が、彼の教会に来て救われることなのです。

私はリード兄弟をよく知っています。長い間、彼と交わりを持ってきました。

神の御前に立つ彼の心の在り方を、私ははっきりと知っています。

彼と同じテーブルについて語り合い、共に働いてきました。

神の油注ぎが彼の上に臨んでいるのを見たとき、「ああ、この人は真実な友だ」と私は確信しました。もしそうでなかったなら、私はそれを感じ取っていたはずです。ですから、私は心から彼に感謝しています。

6 それで、今朝お話ししたのは、フィンランドで起こった出来事についてでした。

それは、ここアメリカで私に与えられたひとつの幻に関するものです。

今朝いらっしゃった方、どれくらいおられますか？——手を挙げてみてください。そうですね、覚えておられますね。その幻とは、「ひとりの小さな少年が死からよみがえる」というものでした。この出来事は、今もフィンランド政府の記録として正式に残されています。私はそのときの政府の封印を受け取っています。

その少年は、車にひかれ、体が押しつぶされるような惨い状態で道端に横たわっていました。すでに三十分ものあいだ、息をしていなかったのです。

けれども——その出来事が起こる二年も前に、神は私にその幻を見せてくださっていました。「その日、その場所で何が起こるか」を、はっきりと示してくださっていたのです。そして、神はその言葉どおりにその小さな少年を死からよみがえらせてくださいました。

7 数日前、私はマネージャーの一人——ドイツの貴族、バロン・フォン・ブロンバーグ氏——とともに、フロリダ州セントピーターズバーグで座っていました。

彼には、ロシア占領地域とアメリカ占領地域の境界近くで救い出した小さなドイツ人の少年がいました。その少年には二人の姉がいました。

ある日、ロシア兵たちが家に押し入り、その姉たちを床に押し倒し暴行していました。父親が止めに入ると、兵士たちは彼を射殺しました。

その後、彼らは姉弟を連れ去り、収容所のような石炭鉱山に入れたのです。

昼間は、少女たちに石炭を押し出す重労働をさせ、

夜になると衣服を剥ぎ取り、兵士たちの前で裸で踊らせた——。

そのうちの一人は気が狂い、もう一人は記憶を失い、ほどなくして命を落としました。しかし、この小さな男の子は、ある日逃げ出すことに成功しました。

どこかに身を隠しながら、荷物の下に潜り込み、国境近くまでたどり着いたのです。そして、荷の下から抜け出して、ついにアメリカ占領区域へと逃れました。

それが今からおよそ八か月か十か月ほど前のことです。

その少年は、今ではかなり上手に英語を話せるようになっていました。

そして彼はこう言いました——

「ブラナム兄弟、あのフィンランドの少年のよみがえりの出来事は、ロシア中に広まっています。みんながその話を知っているんです。」

8 さて、今朝お話ししたところの続きをお話しします。

二人の少年がいました——そのうちの一人が車にはねられ、体が押しつぶされるようにして道端に倒れ、すでに息絶えていました。

けれども、その子こそが神によって死からよみがえらされたのです。

もう一人の少年は病院へ運ばれました。その翌晩には、足に補助具(ブレース)をつけていた小さな女の子が完全に癒されました。

その出来事を目の当たりにした人々は、皆、歓喜に包まれました。

私は彼らの言葉を理解することさえできませんでした。

それでも、聖霊が会衆の中からお一人お一人を指し示し、こう言われるのです。

「そこに座っているその人——『主の御霊がこう言われる。あなたはこれこれのことをした。それが原因でこの病を患っている。』」そして通訳者がその言葉を伝えると、まさにその通り——一点の誤りもなく、示された通りのことが起こるのです。聖霊の働きは一度たりとも失敗したことはありません。

これまでも、そしてこれからも決してありません。

それは人の力ではなく、まぎれもなく「神ご自身の御業」だからです。

9 その晩のことを、今でもはっきりと覚えています。あの夜、私が宿へ戻ろうとすると、人々が「もうひとりの赤ちゃんのところへ来てください」と必死に頼んできました。その子はまだ息をしていました——三日目のことでした。

けれども、その子は一度も体を洗われることもなく、車が顎のあたりを打ちつけ、木の幹に押しつけられるようにして頭が潰れ、脳震盪を起こしていました。

どんな状態だったか、お分かりになるでしょう。見るに耐えないほどの痛ましい姿でした。その子の母親と父親は、あまりの悲しみに取り乱し、私が滞在していたホテルの入口にすがりつくようにして泣き伏していました。私が外に出ようとする、彼らの上をまたいで通らなければならないほどでした。

しかし、集会では厳格な規定がありました。「集会中は個別の呼び出しには応じない」なぜなら、一人のもとへ出向けば、他の人々に不公平が生じてしまうからです。そのため、すべての人が平等に神の臨在のもとに來られるようにと、

私たちは「皆が集会に来て受ける」という原則を守っていたのです。

10 翌日、その小さな母親——本当に気の毒な、か弱い方でした——がまたやって来ました。すると女性の通訳者が私にこう言いました。「兄弟、どうかあの可哀そうなお父さんとお母さんのところへ、せめてひと言だけでも声をかけてあげてください。あの子はまだ意識が戻らず、ずっと横たわったままなんです。」

私は言いました。「それなら、ここに連れてきてください。」

そうして彼らはその両親を上階の部屋に連れて来ました。

もちろん、やりとりはすべて通訳を通して行われました。

この通訳というのが、なかなか大変なのです。

ですから私は、大勢の通訳を介する集会では、声を張り上げる必要がほとんどありません。たとえばアフリカでのこと。十五の部族の通訳が必要でした。

私はまず英語でこう言うのです。「イエス・キリストは神の御子です。」

するとそれが順に通訳されていきます。最初の部族の通訳が「ブルンプ、ブルンプ、ブルンプ…」というような音を発して訳すのです。

それが彼らの言葉で「イエス・キリストは神の御子です」という意味なのです。

次の部族では、「ムック、ムック、ムック」と別の音で訳されます。

それも同じく「イエス・キリストは神の御子です」。

こうして次々と通訳が伝えていき——部族から部族へ、言葉から言葉へと——

全部で十五もの通訳を経て、ようやく最後の部族にまで届くのです。

ですから、一文を話しただけでも、私はいったん席に戻り、水を飲んで一休みするほどでした。それほどまでに、神の福音は多くの国と言葉を越えて伝えられていくのです。

11 それで私は、ひと言話したら水を飲みに行き、しばらくバクスター兄弟と話をしていました。ちょうど次の訳が「そして主は罪人を救うために地上に来られた」というところまで届くころには、また席に戻って続きを語る、という具合でした。ですから、あまり多く話す必要はなかったのです。

それでも、一つのメッセージを最後まで伝えるには本当に長い時間がかかりました。ここアメリカで十～十五分で話せるような内容でも、通訳を経ると一時間半ほどかかるのです。さて、その日のこと——私たちが階段を降りていくと、その小さな母親が夫と一緒にそこに立っていました。そして彼女は床にひれ伏し、涙を流しながらフィンランド語で何かを必死に話していました。

通訳のアイザクソン姉妹が私に言いました。「彼女は、あなたに息子を癒してほしいと懇願しています。」医者たちはすでにこう言っていました——

「もうこの子に地上での希望はまったくない。」と。それほどまでに、その小さな男の子の命は尽きかけていたのです。

12 私は彼女の話聞いて、静かに言いました。「私はその子を癒すことはできません。」通訳がその言葉を伝えると、母親は涙ながらにこう言いました。「でも、あなたはあのもう一人の男の子を、死からよみがえらせたではありませんか。

うちの子は、まだ死んではいないのです。」——その時、私は思い出しました。

医者が「死亡」と宣告した人々が、神の力によってよみがえったのを、私はこれまでに三度見たのです。そのうちの一人は、この講壇で証をしたことのある方です。私がここに最初に来たとき——いや、二度目のときでした。ハッティ・ウォルドロップ姉妹です。覚えておられますか？アリゾナ州フェニックスでのことです。彼女は心臓と結腸のがんで亡くなりました。次は、私の住む町の男性、イライジャ・ペリーという人でした。彼は事故で亡くなり、医師によって死亡確認を受け、遺体として横たえられていました。しかし——神はその人々を再び立ち上がらせてくださったのです。

13 ハッティは死からよみがえらされ、今も生きています。

彼女はその後、ペンシルベニア鉄道で働いていました。

次に起こったのは、あの赤ちゃんの出来事です。

ミズーリ州ケネットから来た女性の子どもでした。

多くの人が、あの子は死んでいたのだと思っています——実際、そうだったかもしれません。あの晩のことを覚えておられるでしょう。

あの会場の後ろで、盲目の黒人の小さな女の子が癒された夜です。

前回ここに来たときの出来事でしたね。

その女性もまた、がんの癒しを受けてカリフォルニアまで行き、そこで証をしました。今夜この場にもおられるかもしれません。

けれども、あのとき彼女が本当に死んでいたのかどうか——

それは私には分かりません。おそらく深い昏睡状態にあったのだと思います。

だから、確かに「死んでいた」と断言することはできません。

14 しかし、いずれにしても、あの三件——それぞれの医師が正式に「死亡」と記した出来事——それらは確かに死からのよみがえりでした。

さて、今回のこの小さな少年は、まだ死んではいませんでした。

けれども意識はなく、三日間ずっと昏睡状態が続いていました。

彼らは私に言いました。「どうか病院へ来てください。」

しかし私は言いました。「規定により、私はここを離れて病院に行くことはできません。でも、ここであなたの息子さんのために祈っています。」

それから私はこう尋ねました。「ところで、あなたがたはクリスチャンですか？」

彼らは答えました。「いいえ。」私は言いました。「そうですか。——よく聞いてください。もし、あなたがたが私の助けを願うなら、まず神の御前で恵みを見いだすべきです。クリスチャンになりなさい。そうすれば、神があなたの息子さんに憐れみをかけ、命を延ばしてくださるかもしれません。たとえもし神がその子を召されたとしても——その子はまだ幼く、六歳ほどの子どもです——

その子は天国へ行くでしょう。そこにはもう、事故も悲しみもありません。

けれども、もしあなたがたが罪のまま死ぬなら、決して天国へは行けません。

そして、あの子にも二度と会うことはできないのです。

けれども、もしその子が死んだとしても、あなたがたがクリスチャンであるなら、いつの日か天でその子と再会し、永遠に共に生きることができるのです。

それに——もしあなたがたが主に立ち返るなら、神はその子の命をこの地上でも延ばしてくださるかもしれません。」彼らはその話を聞いて、「どちらにしても損はない」と悟りました。そして、「クリスチャンになります」と言ったのです。

私たちはその場でひざまずき、共に祈りました。彼らは心からキリストを受け入れたのです。祈りを終えて立ち上がると、若い母親——二十二歳か二十三歳くらいの小柄な方でした——が、涙ながらに何かを私に語りかけてきました。

通訳が私に言いました。「彼女はこう言っています——『これで、どうか私の息子を癒してください。』」

15 私は言いました。「まあ、それは本当にあなたの信仰の表れで、ありがたいことです、姉妹。けれども、私にはその子を癒す力はありません。」「主イエスご自身が、まず“何が起こるのか”という幻(ビジョン)をお与えくださらなければなりません。そのときになって初めて、私はあなたにお伝えできるのです。」

すると彼女は、涙ながらにこう言いました。「では、そのビジョンを見せてください。」私は穏やかに答えました。

「あなたのその思いは本当に美しいことですが、私が自分の意志で見ることにはできません。神ご自身が、みこころによりお与えくださらなければならないのです。」彼女はさらに言いました。「でも、あなたはもう一人の男の子のビジョンを見たでしょう?」「ええ、その通りです。」私はうなずきました。

「けれども、あれは私が求めたものではありませんでした。

そのとき私は、ここフィンランドに来ることさえ知らなかったのです。

神が一方的にお与えになったのです。——主の主権的なご計画の中で。」

「ですから、私が望んだからといって、見ることはできないのです。」それでも母親は食い下がりました。

「それなら、せめて病院へ来てください。」

私は言いました。「いいえ、それでは規定を破ることになります。」

私はこの部屋に入って祈ります。神はこの場所でも、病院にいるのと同じように、私の祈りを聞いてくださいます。」

16 それで私は部屋に入り、祈ろうとしました。すると母親が言いました。

「あなたがその部屋に入るなら、私はここで待っています。あなたがビジョンを見るまで待ちます。」——なんと愛らしい、そして真実な信仰でしょう。

けれども、私は静かに答えました。「主が必ずしもビジョンをくださるとは限りません。何も語られないこともあります。私は神に“見せてください”と強要することなどできないのです。ただ、主が望まれるなら……そのときだけ見ることができなのです。」通訳のアイザクソン姉妹がなんとか説得し、その夫婦はしぶしぶ病院へ戻ることになりました。——少なくとも、そう聞いていました。

ところが実際には、彼らは病院へ行かず、いったん家に帰ったのです。

それから約10分ほどして、電話が鳴りました。

ちなみにフィンランドの電話というのは、長い棒のような受話器が付いていて、後ろに差し込み、横のハンドルをぐるぐる回してつなぐ仕組みなんです。

電話の相手は例の母親でした。「もうビジョンを見ましたか?」と。

「いいえ、まだです。」と答えました。さらに10分ほど経つと、また電話が鳴りました。「今度こそビジョンを見ましたか?」

17 アイザクソン姉妹がその母親に言いました。

「主は必ずしもビジョンをお与えになるとは限りません。」

けれども、どうか神に仕え続け、感謝し、あなたの息子さんが癒されると信じていなさい。」それからというものの、教会の集会が始まる時間になるまで、

母親は15分か20分おきに電話をかけてきました。「ビジョンは見ましたか?」「神様は何かお語りになりましたか?」と、涙ながらに尋ねてくるのです。

そのたびに私は言いました。「神は、もしかするとこうお告げになるかもしれませんが——『その子を天に召す』と。もし神がそうされるなら、私たちはただこう祈るしかありません。『御心のままになさってください』と。」

18 それで——その夜、私たちは教会へ向かいました。

その集会で癒されたのが、今朝お話した、あの小さな女の子でした。

集会が終わり、私たちは帰り道につきました。

宿に戻って階段を上がり、それぞれの部屋へ向かいました。

アイザクソン姉妹は自分の部屋へ。ジャック・ムーア兄弟とリンジー兄弟は同じ部屋。バクスター兄弟と私の弟ハワードも一緒の部屋でした。

私はというと——幻(ビジョン)が与えられることがあるため、

いつも一人きりの部屋を与えられていました。部屋に入ろうとしたとき、ふと思い出したのです。ここにカナダの友人がいらっしゃるなら、どうか気を悪くしないでくださいね。——以前、カナダでハワードがくれたキャンディのことです。

当時、カナダでは砂糖があまり手に入らず、そのキャンディが何とも言えない味でして……正直、ひどい味でした(笑)。その晩、部屋に入るとき、ハワードが私にこう言いました。「ビル、あのカナダのキャンディの

こと、覚えてるか?」

私は笑いながら言いました。「もちろん、覚えてるさ。」

19 ハワードが言いました。「じゃあ、今度はこのフィンランドのキャンディを食べてみるよ。」彼は小さな四角いキャンディを二つ、私の手のひらに置きました。

私はそれを聖書の間にはさんで持ち、部屋へと入りました。

部屋には、重厚な大理石のテーブルがありました。古い建物らしく、どっしりとした造りです。私はそのテーブルの上に聖書をそっと置きました。

そのとき、時刻はちょうど夜の十二時ごろ。けれども、外はまだほの明るく、完全には暗くなっていませんでした。季節は四月、すでに夜明けに近い光が差していたのです。フィンランドではご存じのように、一年のうち半分が夜、

もう半分が昼——いわゆる「白夜の国」です。まさに「真夜中の太陽の地」——

その柔らかな光の中で、私は静かにその夜を迎えていました。

20 ラップランドの奥地から、何千ものラップランド人たちがやって来ていました。

彼らはトナカイを操り、小さなそりに乗って雪原を駆け下りてくるのです。

トナカイは長い舌を脚のあいだから垂らし、息を荒げながら進みます。

その後ろに人々が乗ったそりが続く——そんな光景でした。

そのとき、国中の人々が集まってきていたのです。

「メッスハッリ」という大きな建物には、二万五千人もの人々が集まっていました。

その日の午後三時ごろ、私が会場に入ると、

外には六つの街区にわたって、人の列がぎっしりと並んでいました。

横に三十人ずつ並んだ長い列——まるで人の波のようでした。

そしてその行列の横では、すでにメッスハッリの中が二万五千人で満員になっていたのです。

彼らは本当に主を愛していました。

私は今朝も言いましたが——

彼らはまるでアーカンソーの信者たちのように、

どんな状況の中でも主に仕えることを喜びとする人々でした。

寒さも、距離も、言葉の壁もものともせず、

ただ「主に仕えるために」そこへ来ていたのです。

21 そして私は立ち上がり、聖書をテーブルの上にそっと置きました。それから窓のほうへ歩み寄り、外を見下ろしました。公園の方から、人々がぞろぞろと帰ってくるのが見えました。皆が互いに語り合い、笑い、喜びに満ちていました。

神がなされた御業——あの出来事について話していたのです。

彼らの表情は明るく、顔いっぱい感動と感謝が溢れていました。

女性たちは大きなブーツを履き、若い娘たちも年配の方も、

分厚いスカートをはいていました。フィンランドでは冬でも夏でも、同じようにその厚い衣服を着るのです。彼女たちは笑いながら、公園を通り抜け、手を振り合い、主は生きておられる」と語り合っていました。

私はその光景を見ながら、思わず手を高く上げて祈りました。

「おお、大いなる主なる神、エホバよ!なんと驚くべきお方でしょう!

主よ、あなたはなんと良いお方でしょう!あの小さな少年をよみがえらせるという幻をお示しくださり、そして今夜、あの小さな少女をも癒して下さった——

主よ、あなたの御名はなんと尊いことでしょう!」

22 今朝はお話ししませんでしたでしたが、あの夜の集会では、町の高官の一人——たぶん行政の役職についていた方——の娘さんにも奇跡が起こりました。

その少女はおよそ十年間、病の熱によって背中が引きつり、身体が不自由になっていたのです。歩くときはいつも体を傾け、ぎこちない足取りでした。

けれども、その夜の集会の最中、神はその少女を完全に癒して下さいました。

彼女は立ち上がり、まっすぐに、そして軽やかに歩き始めたのです。

あの夜は、本当に驚くべき夜でした。マニネン兄弟やほかの奉仕者たちは——

『The Voice of Healing(癒しの声)』誌を取っておられる方なら、その写真をご覧になったでしょう——集会のあと、癒された人々が置いていった松葉杖や支え棒を集めていました。それが束にすると抱えきれないほどの山となったのです。

たった一晩の集会で、それほど多くの方が癒されたのです。

人々は、ただひとつの超自然的な御業を見ただけで信じました。

「祈ってもらわなければ」と言う人はほとんどいません。

彼らはただ立ち上がり、「自分も癒された」と信じて歩き出すのです。

それで十分でした。信じる——それだけで。私が行ったどの国でも、人々はそのように素直に信じました。けれども、悲しいことに、アメリカでは少し違います。なぜでしょうか?私たちは“教理”をあまりにも詰め込みすぎたのです。

何かが起こると、すぐに「これは正しいか」と“誰それ博士”に尋ねなければ気が済まない。ある博士は言います——「それは神学の話だよ。」別の博士は言います——「いや、思念伝達(メンタル・テレパシー)だ。」また別の人は——

「悪霊の仕業だ。」そして、“誰それ博士”はこう言います。「そんなのは馬鹿げている。」別の博士は言います。「それは悪魔の働きだ。」

——こうして人は、神の単純な御業を信じる心を失ってしまうのです。

23 ああ、なんということでしょう!——これでは信じられないのも無理はありません。——これでは、信仰が働かないのも当然です。どうか「誰それ博士」に尋ねるのをやめてください。イエスが何と言われたか——それを取って、それで十分なのです。主は「昨日も今日も、そして永遠に同じ方」であるとおっしゃいました。それだけで決着がつくのです。パリサイ人たちも同じでした。

彼らは何をするにも、まず祭司に「これは正しいことか」と尋ねなければ気が済まなかった。それが、イエスを見ても彼が誰であるかを悟れなかった原因でした。そして——まさに今の時代、人々が聖霊を見逃している理由も、まったく同じなのです。クリスチャンの皆さん、よく聞いてください。今日、教会は立派に建ち、制度も整っています。しかし、その中心にあるべきいのちの粒——

すなわち、聖霊が御民の間でしるしと不思議をもって働かれているその現実——

それを見ようとしていないのです。主ははっきりと約束されました。

「わたしはあなたがたと共にいる。いや、あなたがたのうちにいる。世の終わりまで。」

24 私はそこに立ち、主の御善(みよ)きことをたたえていました。

窓際に立ち、外を見下ろすと、あたりはほの暗く——けれどもまだ街では新聞が読めるほどの明るさが残っていました。時刻はだいたい十一時半から十二時ごろだったでしょう。皆はずでに自分の部屋に戻っていました。

私はその大きな窓のそばに立ち、両手を上げて、向こうに連なる大きな杉の山々を見渡しながら、「主よ、あなたはなんと素晴らしいお方でしょう!」と、神を賛美していました。そのとき——何か不思議な感覚を覚えました。自分の立っているあたりが、ふわりと明るく照らされているように感じたのです。

25 私がそこに立っていると——ふと、横に何かを感じました。見ると、そこに主が立っておられたのです。腕を組み、静かに私を見つめておられました。

そして、その前には——先ほどまで何もなかったはずのテーブルの上に——

ひとつの長いガラスの壺のようなものが現れていました。

高さはこのくらい、やや背の高い花瓶でした。その中には二本の花が生けてありました。私はそれを「イースター・フラワー」と呼びましたが、正式な名を知らなかったのです。小さな鐘のような形をした花で、黄色いものと白いものがあり、ちょうどイースターの頃に咲く花。そう、「スイセン(ダフオディル)」と呼ばれる花だったと思います。しかし、その国(フィンランド)では、その花は本来、育たないはずなのです。それなのに——そこに確かにあったのです。私は思いました。「これは一体、何だろう?」よく見ると、そのうちの一本——北の方を向いていた花が——花瓶の上に倒れ、横たわるようにして、その長い茎をテーブルの上に伸ばしていました。もう一本の花は、頭を垂れるようにして、少し下を向いていました。

26 私はその光の中に包まれながら、ふと横を見ると——そこに主が立っておられました。いつもと同じお姿でした。背の高い方で、肩まで伸びた黒髪。

少し褐色がかった肌、素足で、長く白い衣をまとっておられました。

腕を組み、静かに私を見つめておられたのです。およそ九十キロほどの体格でしょうか。そのお方はいつも、柔らかな光の中に立っておられます。私は思わず振り返り、ひざまずこうとしました。すると主は言われました。「あなたの兄がくれたものは何か?」私は答えました。「キャンディを二つももらいました。それをこのテーブルに置きました。」主は言われました。「それを食べなさい。」

私は手を伸ばしてその小さなキャンディを取り、一つを口に入れて噛みはじめました。その夜食べるつもりでいたのですが、賛美に夢中になり、そのまま置いたままだったのです。噛んでみると、思ったよりもおいしい味がしました。そして飲み込んだ瞬間——テーブルの上に横たわっていた北向きのイースター・フラワーが、「シュウツ!」という音を立ててまっすぐに立ち上がったのです。

私はそれを見て、息をのみました。しかしその意味がわからず、ただ見つめていました。

27 私はもう一度、主の方を振り返りました。すると主は穏やかに、しかしはっきりとこう言われました。「もう一つのほうも食べなさい。」私はもう一つのキャンディを取り、口に入れました。けれども——なんということでしょう。それは先ほどのとはまるで違う、ひどい味がしたのです。見た目は同じ小さなチョコレートのような角砂糖の形なのに、味はまるで糊(のり)やでんぷんのようで、粉っぽく、飲み込めないほど不快でした。私は思わず口から出しかけました。そのとき、ふと見ると、もう一方のイースター・フラワー——南を向いていた方の花が、

ゆっくりと首を垂れ、だんだんと下へ下へと沈んでいくのが見えたのです。

すると主が静かに言われました。「それを食べるのをやめれば、もう一人の少年も死ぬことになる。」私ははっとして、慌ててそのキャンディを口に戻しました。

そしてできるだけ早く噛み、急いで飲み込みました。その瞬間——

南を向いていた花が、「シュウツ!」と音を立ててまっすぐに立ち上がったのです。

28 まさに——その二人の少年が車にはねられたときの姿と同じでした。

一人は北の方へ倒れ、もう一人は南の方へ倒れた。そして今、花瓶の中で二本の花が、まっすぐに立っていたのです。私は主を見上げて言いました。

「主よ……わかりません。これは何を意味しているのですか？」すると主は、静かでありながら力強い声でおっしゃいました。「あの母を呼びなさい。そしてこう言いなさい。『主はこう言われる——あなたの息子は生きる。死なない。』」そう言われると、主の御姿はふっと消えました。私はその場に立ち尽くしました。全身がしびれたようになり、まるで力が抜けていくようでした。今朝、ベッドの上で感じたのと同じ、あの圧倒的な感覚——神の臨在の中にいるときの感覚です。私は自分の指を噛み、手を動かしてみました。「話せるだろうか？ 声が出るだろうか？」唇は分厚くなったように感じられ、思うように動きませんでした。

それでも、なんとか聖書を手に取り、部屋を飛び出しました。廊下に出ると同時に、私は大声で叫びました。「ハレルヤ！」その声に、周りの部屋の扉が次々と開き、人々が驚いた顔でこちらをのぞき込みました。(ムーア兄弟たちをご存じの方は、彼らに尋ねてみてください。確かにあの夜、私は叫びました。神の御手が確かにそこにあったのです。)

29 私は叫びました。「ムーア兄弟！ みんな来てください！ それからアイザクソン姉妹も！」彼らは驚いた様子で部屋から出てきました。

私は言いました。「アイザクソン姉妹、あの母親に電話をしてください。そしてこう伝えてください——『主はこう言われる。あなたの息子は生きる。死なない。』と。」彼女はすぐに、エレベーター(彼らは“リフト”と呼んでいました)のそばにある小さな電話台へ行きました。その古い電話のハンドルを回し、母親の家に電話をかけました。ところが、家の方ではすでに知らせが入っていました——

「少年の容体が急変し、今まさに息を引き取ろうとしている」と。

母親は泣き叫びながら赤ん坊の世話をしていたベビーシッターに任せ、

急いで病院へ向かいました。その病院というのも、特別な建物ではなく、

普通の住宅を改装したような場所でした。そこに重病の人々を収容していたのです。アイザクソン姉妹はその病院にも電話をかけ、母親が着くと同時に受話器を渡してもらいました。病院のスタッフはこう言いました「少年は今、危篤です。」

するとアイザクソン姉妹は力強く言いました。「ブラナム兄弟がいま幻を見られました。主がこう言われます——『あなたの息子は生きる。死なない。』」電話口の向こうで、母親は涙ながらに叫びました。「主よ、感謝します！」アイザクソン姉妹はさらに言いました。「恐れてはいけません。その子は死にません。」

30 小さな母親はようやく電話口で話せるようになると、涙まじりにこう言いました。「ええ、よく分かります。ほんの数分前まで、私たちはその子の枕元に立っていました。すると突然、息子がベッドの上で起き上がったのです！すでに体を清め、水も飲ませました。明日の朝には家に連れて帰るつもりです。」——神は、すでに彼女の祈りに答えておられたのです。友よ、私はその少年に触れてもいません。どちらの少年にも、一度たりとも手を置いてはいません。それは神ご自身が、彼らの祈りに応えてなされた御業でした。私はただ、それを見せられただけ——そして主が「行ってこれを伝えよ」と命じられたのです。それだけのことです。ですから、私を“神の癒し主”などと呼ぶのは間違いです。私は自分の力では何ひとつできません。すべては神の恵みによってなされたことなのです。

31 たとえば、私がここにいるリード兄弟に言ったとしましょう「あなたは、あの人にこれこれのことを伝えなさい」と。それは、私が彼にメッセージを託したということになります。同じように、私たちの中には、それぞれ神によって定められた務めがあります。ある者は説教者としてリード兄弟のように、また多くの人のように生まれついてその働きに召されています。またある者は音楽家として生まれついています。今夜も、若い姉妹があの鉄琴(シロフォン)をたたき、オルガンやピアノを奏でておられるのを見ました。なんと美しい賛美でしょう！けれども私は、音楽のことは何ひとつ知りません。音が合っているのか外れているのかさえ分かりません。なぜなら、神は私を音楽を奏でる者としてではなく、幻を見る者(先見者)としてお召しになったからです。彼らは音楽を通して神の栄光を現します。それが、彼らに与えられた「福音の宣べ伝え方」なのです。説教者は御言葉によって福音を宣べ伝えます。そして私の場合は、幻を通してそれを伝えるのです。神があなたにお送りくださった多くの証人たちどうか彼らを信じてください。あなたが賛美を歌うとき、心の奥深くで魂が祝福を受けるのを感じませんか？それは神がそこにおられる証です。説教者が語る時、その言葉があなたの心の中で「確かにそうだ」と響くことがあるでしょう。それが聖霊の働きなのです。神は、教会を整えるた

めに、さまざまな賜物をお与えになりました。第一に使徒、第二に預言者、さらに癒しの賜物、奇跡のわざ、教師などすべては教会を完全にするためなのです。ですから——疑わず、神を信じてください。神が必ずご自身の御業を成し遂げてくださいます。あなたはそれを信じますか？では、頭を垂れて祈りましょう。リード姉妹……

32 私は心から感謝しています。これまで、車いすに乗って来られた方、担架や寝台で運ばれて来られた方が、ひとりとして癒されずに帰られたことはなかった——

少なくとも、私の知るかぎりでは。今夜ここにも、一人の女性が見えます。

おそらく腕か脚を痛めておられるのでしょうか。しかし、聖霊はきっとその方にも臨まれ、その痛みの意味と、神の御心を明らかにして下さるでしょう。

主はあらゆる病と苦しみの癒し主なのです。——ああ主よ。この数年の働きを思い返すとき、私の心はあなたへの感謝で満たされます。幾十万という人々……。

それでも、私たちは今日という日を終え、天の故郷に一日近づいたのです。この日もやがて歴史の一ページとなり、本がめくられるように過ぎ去っていきます。

しかし、その一日が、いつの日か私たちが御座の前で対面する日の証しとなるでしょう。——さあ、これからもう一つの務めがあります。病める人々のための祈り、そして魂のための祭壇の呼びかけです。

33 主よ、今夜、世界中のあなたのしもべたちを祝福してください。

恐れずに講壇に立ち、信仰をもって福音を力強く宣べ伝えている勇敢な牧師たち

どうかその一人ひとりを、すべての国々で、あなたの御手の中に守ってください。主よ、この古びた地球は、クリスチャンたちの流した血で染まっています。

祭壇は涙に濡れ、祈りが満ちています——「来てください、主イエスよ!」と。

いつの日か、主は必ずおいでになります。そして私たちはそのお姿を仰ぎ見るのです。父よ、今夜、私に与えられた務め——それは、この病める人々のために祈ることです。嵐の夜にもかかわらず、この小さな群れはここに集いました。彼らはあなたを愛し、何十キロも車を走らせて来ました。きっとこの中には、深く病んでいる人も、また心の中で迷っている人もいることでしょう。神よ、今夜ここにいるすべての人が、喜びと癒しを得て、笑顔で家路につくことができますように。罪人は悔い改め、離れていた者は御もとに立ち帰ることができますように。

どうか今夜が、あなたの栄光に満ちた祝福の夜となりますように。この礼拝を通して、すべての栄誉と賛美があなたに帰せられますように——アーメン。

34 全能の神よ——あなたは、私たちの主イエス・キリストを死からよみがえらせ、

御使いを遣わしてしもべを導き、この人生の歩みの中で、あなたの道を示してくださいました。どうか今夜も、その同じ御使いが私のそばに立ち、この会衆の前にイエス・キリストご自身を現してください。この祈りを、主イエス・キリストの御名によっておさげします。——アーメン。（テープの空白部分）

……世界中で週に何千という人々が、主の御業を証しています。数日前、ドイツから一通の手紙が届きました。それは、長い年月、関節炎のために車椅子生活をしてきた女性からのものでした。彼女は私の小冊子『神に遣わされた人 (Man Sent From God)』を読みました。その本はドイツ語、フィンランド語、スウェーデン語、アフリカンス語などに翻訳されていたのです。彼女はその中に書かれていた信仰のハンカチの教えを見て、自ら手紙を送り、その祈りのハンカチを受け取りました。彼女はそのハンカチを服の下に留め、手をその上に置いてこう言ったのです——「悪魔よ、ここから出て行け!」その瞬間、彼女は椅子から立ち上がり、まっすぐに部屋の中を歩きはじめました。主は再び、御言葉どおりに生きて働かれるお方であることを示されたのです。

35 （テープの欠落部分）そして、あの赤ん坊は日射病にかかったのだと思います。

午前十一時ごろ、父親と一緒に刈り入れの畑に出ていたときのことでした。

突然、子どもが泣き出して言いました——「お母さん、頭が痛い！」父親は急いで家へ帰り、母親がその子をひざの上に抱くと……昼食の頃には、息を引き取っていたのです。その家の母親は、かつて預言者エリシャのために、家の脇に小さな部屋を建てていました。旅の途中、エリシャが立ち寄れるようにと。そこには一つの寝台と、腰かけ、そして水差しが置かれていました。彼女は息子の亡骸をその寝台にそっと横たえました。預言者の寝台に置く。なんとふさわしい場所でしょう。その通りです。そのあと夫が帰ってきて言いました。「ラバに鞍を置きなさい。すぐに行くんだ。途中で止まるな。」夫は言いました。「カルメル山へ行っても仕方がない。今日は安息日でも新月でもないから、預言者は山にはいないだろう。」だが、妻は答えました。「それでも構いません。——行きます。」

彼女の心にはただ一つ、神の人のもとへ行くという決意があったのです。

36 彼女は僕(召使い)に言いました。

「このラバに鞍を置いて進みなさい。私が言うまでは決して止まってはなりません。」——私はこの言葉が好きです。「前に進みなさい。決して止まるな。」

彼女には確かな目的があったのです。さて、預言者エリシャが洞窟から出てくると、遠くに彼女の姿を見つけました。エリシャは召使いゲハジに言いました。

「見よ、あのシュネムの女がこちらへやってくる。彼女は深く悲しんでいるようだが、何があったのか私には分からない。神はまだそれを私に明かされていない。」——そうです、神は預言者にすべてをお告げになるわけではありません。

ときには沈黙を保たれるのです。それからゲハジは女に尋ねました。「あなたにすべて順調ですか？ご主人はお元気ですか？そして——子どもはどうですか？」

37 彼女は答えました。「私にすべて良し。私の夫にもすべて良し。——そして、子どもにもすべて良しです。」ああ、私はこの言葉が本当に好きです。

彼女の赤ん坊は、いま家の寝台の上で冷たく横たわっているというのに、

それでも彼女は信仰をもって言ったのです——「すべて良し。」彼女は知っていたのです。エリシャが神の預言者であることを。彼がその時代における神の人であることを。そして、神がその預言者のうちにおられることを。彼女の心には確信がありました。「もし彼のもとへ行くことができれば、なぜ神が私の子を取られたのかが分かる。」——なんとという信仰でしょう。まるで、マルタがイエスに会ったときのように。「主よ、もしあなたがここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう。」——そう言いながらも、彼女は信じていました。さて、エリシャが彼女を見ると、彼女はその足もとにひれ伏しました。ゲハジが慌てて彼女を引き起こしましたが、彼女は涙ながらに、何が起こったのかを話し始めました。それを聞いたエリシャは、すぐにゲハジに言いました。「わたしの杖を取り、すぐに行きなさい。誰かに会っても、あいさつをしてはならない。誰が話しかけても、答えてはならない。ただまっすぐ行って、その杖を子どもの上に置きなさい。」——神の人の言葉には、迷いがありません。信仰の人の歩みは、ただ「前へ進め」「振り返るな」というのです。

38 エリシャはよく知っていました。自分の手が触れるものには、神の祝福が宿る——ということ。しかし今度は、それを母親が信じるかどうかは鍵だったのです。まさにそこに、使徒パウロが「ハンカチ」や「エプロン」に信仰を託した根拠があります。彼もまた、神がご自身のうちにおられることを知っていたのです。エリシャは、自分が祈り、手を置いたものは祝福されることを確信していました。それゆえに、聖書は「病める者の上に手を置くなら、癒される」と命じているのです。それは「あなたの手が触れるものは祝福される」という神の原則に基づいています。同じように、パウロの体から取られたハンカチやエプロンが人々に持ち運ばれ、その結果、病が癒され、悪霊が出ていった——

それは、人がパウロを見たからではなく、神が彼のうちにおられたからでした。

また、ペテロの影が通り過ぎるだけで人々が癒されたのも、

彼らがその神の臨在を信じていたからです。さて、もう一度、あのシュネムの女のところに戻りましょう。私はこの出来事が本当に好きです。彼女は、杖そのものには信仰を置きませんでした。そしてこう言いました。「主は生きておられます。あなたのたましいも生きています。しかし、私はあなたを離れません。」

なんと決意の信仰でしょう。彼女の信仰は、「道具」ではなく、神の人ご自身を通して働く神に向け

られていたのです。彼女の心にはこうあったのです——

「私はこの方と共に行く。主の人を離れない。」——このような「とどまる信仰」、あなたもお好きではありませんか？

39 家に着くと、そこには泣き叫ぶ人々の姿がありました。人々は悲嘆に暮れ、声を上げて泣いていました。預言者エリシャも、どうすればよいか分かりませんでした。しかし、ここからが重要です。彼は静かにその部屋へ入りました。そこには、冷たくなった子どもが寝かされていました。エリシャは部屋の中を行ったり来たりしながら歩きました。それは、祈りの言葉を口にするためではありませんでした。ただ、神の導きを待ちながら歩き回っていたのです。そして、ついに彼は子どものもとに近づき、その小さな体の上に自らの体を重ねました。

預言者の唇を子どもの唇に、鼻を鼻に、頭を頭に合わせて——エリシャは、そのまま身を伏せて祈りの姿勢を取ったのです。神の力が命を呼び戻すまで、彼はただ静かに、全身で神に触れていたのです。

40 神は、確かにその預言者のうちにおられました。エリシャがその子どもの上に身を伏せていると、やがて——赤ん坊の肌に温もりが戻ってきたのです。

彼は立ち上がり、再び部屋の中を行ったり来たりしました。そしてもう一度、子どもの上に身を伏せました。唇を唇に、鼻を鼻に、手を手に重ねて——

彼は神の力が完全に働くまで身を横たえました。その瞬間、

子どもが七回くしゃみをしたのです。(——この「七」という数字の意味を語る時間があればよいのですが、今は触れずにおきましょう。しかし、聖書における七は完成を表すことを、あなたはご存じでしょう。)子どもはその後、命を吹き返したのです。神がその預言者のうちにおられたからです。そして——あの母親はそれを知っていました。「もしこの神の人のもとへ行けるなら、私の子がどうなったか、神の御心を知ることができる。」彼女は、その信仰と尊敬によって、神の力に触れたのです。そして神はその子を再び彼女の腕に返された——生きたままの姿で。

なぜでしょうか？それは、彼女が神のしもべのうちにおられる神を敬ったからです。——その通りではありませんか？

41 だからこそ、人々はパウロが送ったハンカチによって癒されたのです。

彼らは知っていました——

神がああ使徒のうちにおられるということ。

パウロは単なる使徒ではなく、預言者でもあったのです。

そして人々は彼の体から取ったハンカチやエプロンを

病める者の上に置きました。

すると——悪霊は出ていき、

人々は癒されたのです。

——その通りではありませんか？

では、頭を垂れて祈りましょう。

主イエスよ、

ここに、私の前にたくさんのハンカチが置かれています。

もしかすると今夜、どこかの綿畑の向こう、

小さな小屋の片隅で、

視力を失った年老いた父親が

このハンカチの届くのを待っているかもしれません。

あるいは、遠く離れた場所で——

病んだ赤ん坊を寝かしつけながら、

「いつこのハンカチが戻ってくるのだろう」と

心を痛めている母親がいるかもしれません。

神が園光景をご覧になって居るのです。

42 イスラエルがエジプトを出たときのことを思い出してみましよう。

彼らは神の命令に従い進んでいきました。

やがて紅海の岸に行き当たり、

片側には険しい山々、もう片側には荒れた砂漠——

そして背後からはパロの軍勢が迫っていました。

逃げ場のない状況です。

そのとき、聖書の記者のひとりがこう書いています。

「神は怒りのまなざしをもって、火の柱を通して海を見下ろされた。

すると海は恐れおののき、二つに裂け、イスラエルはそこを渡った。」

——神はそのときも、ご自身の民のために道を開かれたのです。

主よ、どうか今夜も同じようにしてください。

これらのハンカチに手を置くとき、

それが病める人々のもとに届くその瞬間、

再びあなたが火の柱を通して見下ろしてくださいますように。

あなたの怒りのまなざしで病を退け、

人々を健康と力の「約束の地」へと渡らせてください。

主よ、そうしてくださいますように。

今、これらのハンカチを——

あなたの御子イエス・キリストの御名によって祝福いたします。

その目的のために。

——アーメン。

43 「よし、ビリー。今夜はどこから呼ぼうか？ 50番から100番？ いや、どうだ？ 最初の方から？ 1番から15番まで？ いや、今夜は後半にしよう。そうだ、Tカードを呼ぼう。今日の午後に配られたTの祈りカード、85番から100番まで。」「だいたい15人くらいが一度に壇上に上がれる人数だからね。その後は、会衆全体に祈りを広げよう。」「それでは——T85番の方はどなたですか？」

（会場の中で「はい」と手が挙がる）「はい、そこですね。T85、T86、T87、T88、T89、T90……そして100番まで、前の方にお並びください。」

そしてブラナム兄弟は壇上から会衆を見渡し、優しく語りかけました。

「さて、残りの皆さん、ちよつとこちらを見てください。今夜、癒されたいと願う方はどれくらいおられますか?『主よ、私を癒してください』と思う方、どうぞ手を挙げてください。」——一斉に、会場じゅうの手が高く挙がりました。

「では次に、こう言う方はいますか?『祈りのカードは持っていませんが、それでも癒されたいのです、ブラナム兄弟』と。そう思う方も、どうぞ手を挙げてください。」——見ると、前から後ろまで、まるで波のように手が上がりました。

あちこちで涙ぐむ人、静かに祈る人、目を閉じてうなづく人……

その光景はまさに信仰の群れ、神の御手を待ち望む魂の海のようにでした。

44 「親愛なるクリスチャンの皆さん——」「どうか、これまでに神がどれほど多くの証を示してくださったかを思い出してください。私は、ただ真実を語っているだけです。どうかそれを信じてください。」「この前に立つ私を見て、心を静めて祈り、そして——もしこの語っていることが真実だと信じるなら、ただ**“それは真理です”**と心の中で受け入れてください。」「このことは聖書によって裏づけられ、科学の検証によっても示され、そしてあなた自身の目で見て確かめることができるのです。」「聖書はこう言っています——」「『二人、または三人の証人の口によって、すべての言葉は確立されるべし。』」「——そうではありませんか?」

「そのとおりだと思う方は、“アーメン”と言ってください。」——会場のあちこちから、力強く、しかし敬虔な声が響きました。「アーメン!」

45 「聖書はこう言っています——」「『イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも同じ方である。』」「——そうではありませんか?」「主ご自身はこう言われました。『わたしは、父がしておられることのほかに、何も行わない。』——そうですよね?」「さらに主は言われました。『わたしのする業を、あなたがたもまた行うであろう。』——その通りではありませんか?」「これが、聖書の真理を裏づける言葉なのです。」「さて、ここに今夜——科学的な証拠もまた与えられています。同じ**火の柱(ピラー・オブ・ファイア)**が、いまも現れているのです!」「もしあなたが確かめたいなら、ジョージ・J・レイシー博士に問い合わせてください。それは正当な、正式な調査結果です。住所も証言も、すべてこの本に記録されています。どの証しも真正なものです。疑う方がいるなら、どうぞ電話をかけてみてください。——その通話料は、私が払います。」「さあ、今夜ここで、聖霊ご自身が、イエス・キリストが地上におられたときと同じ御業をなさっています。」「——そうではありませんか?」「ゆえに、ここには三つの証人が揃っています① 聖書そのもの② 科学的な証拠③ そして今ここに臨んでいる聖霊。これらすべてが、神の御業が真実であることを証しているのです。」

「——アーメン、そうでしょう?」

46 「もし、これを信じないなら——それは罪です。」「もちろん、不信仰こそが唯一の罪なのです。他のすべての罪は、その不信仰から生まれるのです。)(ブラナム兄弟は、会衆を見回しながら語り続けました。)(「…今週中にそのことを詳しく話す時間はないかもしれませんが——さあ、息子が今、祈りの列を整えています。)(ステージの横で動くスタッフに向かって)「係員の方々、少し手を貸してあげてください。——15人、全員そろいましたか? よし、いいですね。」「さて、私はカードを確認します。耳の聞こえない方や、立ち上がれない方がいたら、見落とさないようにしてください。誰かそばにいて指し示してあげてください。)(少し間をおいて、柔らかい声で)「さあ、今、祈りの心を整えてください。」

心の底から信じてください。」「ひとつ、私がいいつも不思議に思うことがあります——」「聖霊を受けた人々、すなわち“聖霊の民”の中にさえ、超自然の御業が実際に現れると、それを見ながらも、なお半信半疑のままにいる人がいるということです。」「神の力が——影も形もない疑いの余地なく——目の前で証明されているのに、なぜもっと喜び躍り上がって天に帰りたいほどの思いにならないのか?」

私には、それが不思議で仕方がありません。)(最初の患者がステージに導かれてくる)「——では、最初の方をこちらにお連れください。)(ブラナム兄弟は静かに手を組み、会場の空気が張り詰めていきました。)

47 「でもね、皆さん——考えてみてください。」「神が実際に働かれても、私たちは時々こうして座ったままで、『ああ、素晴らしいですね。ありがとうございます、主よ。感謝します、父よ。』——それだけで終わってしまうのです。」

「そして家に帰ると、まるでいつもの一日の出来事のひとつのように忘れてしまう。」「けれども、兄弟姉妹

よ、もしこれがアフリカで起きたならどうでしょう!」

「聖霊が群衆の中を動かれ、ある人を呼び出して、その人の心の中の罪や、人生での出来事を示されたとしたら——会場は4時間、歓声と涙と叫びで満たされるでしょう。誰も静まることはできません。人々はその場にひれ伏し、泣きながらキリストに心を捧げるのです。」「彼らのもとでは、人々を神に導くことは難しくありません。——ただ、超自然の御業をひと目見ること、それだけでいいのです。」

彼らはそれを聖書で読み、実際に見たとき、心から信じるのです。」「しかし、今の私たちはどうでしょう?」「私たちはそれを“説明してしまう”のです。『あれは自然現象だ』『心理的なことだ』『偶然だ』——と。だから、何も起こらないのです。」「それが、アメリカに真のリバイバルが起きない理由なのです。」

(少し間をおいて、ブラナム兄弟は静かに続けました。)」私は数日前、ビリー・グラハムの言葉を聞きました。彼はこう言いました——『私は国中を回った。』

だが、どこへ行っても——リバイバルは起きなかった。』ブラナム兄弟は、静かにうなずきながら言いました。「そうです……彼の言う通りです。」

私たちが聖書の中の生ける神の現実を忘れてしまっているからです。」

48 私は思いました。「そうだ、ビリー、それは正しい。次に彼と話すときには、その理由をちゃんと伝えよう」と。もし彼が、イギリスのロンドンでジョージ・ジェフリーズが彼に言った通り——「聖霊のバプテスマを教え、そこにとどまれ」——その通りにしていたなら、彼は今もそこにとどまっていただろう。」

彼がルーイ・ペトラスのそばに立ち、私のすぐ隣に座っていたとき、こう言ったのです。「私はイギリスに行き、自分自身が聖霊のバプテスマを受けてくるつもりです」と。そうだ、それがあの人々が彼を冷たくしてしまう前に始まっていればよかったのにとおもいます。彼のことを気の毒に思います。あの大勢の牧師たちが彼を押さえつけようとしている。私は信じています——彼は本当に自由に働ける人ですが、今は縛られている。彼は真理を知っているのです。だから、神が…そう、あの若者たちのために祈りましょう。みんなのために祈ってください。」

その中の一人、ハイマン・アップルマンのためにも必ず祈ってください。」

私は数日後に彼に会う予定です。神は彼についての幻を私に示してくださいました。——はい、すでにそうなのです。」

49 さて、奥さん。こちらへ少し来てください、姉妹。」

さて皆さん、お願いしたいのは——私のところへ来るとき、まるで「何かの偶像」や「トーテムポール」に触れに来るような気持ちで来てはいけません。そんなことでは何も起こりません。いいですか、ここには特別な力はありません。私はただのあなたの兄弟です。神の御前では、私も皆さんと同じです。いや、マイクロフォンより少しはましですが(笑)、それは私たちが人間——神の息子であり娘であるからです。」

しかし、あなたがここに来るときは、「主の御前に入る」という信仰をもって来てほしいのです。そして、心から敬虔な思いで、全身全霊を込めて「神が私に何かをしてくださる」と信じて来ててください。そうすれば、神に求めたものをあなたは受け取るでしょう。」

敬虔な心で来てください。マルタがイエスの御前にひれ伏したように——

彼女は言いました。「主よ、もしあなたがここにおられたなら、私の兄は死ななかつたでしょう。しかし今でも、あなたが神に求められることは、何でも神がしてくださいます。」

そうです。あなたもそのマルタのように来るのです。それが信仰です。」

50 さて、奥さん。あなたは今夜の最初の方ですから、ちょっと「聖書時代の劇」でもしてみましょ。あなたと私で少し話をしてみましょ。もし私たちが聖書の時代に生きていたとして——あなたが通りを歩いていて、そこでナザレのイエスに出会ったとします。イエスはこのスーツ、このシャツとネクタイを着ておられるとしたら、あなたは近づいてこう言うでしょう。「主よ、どうか私をあわれんでください」と。私はあなたに何が起きているのか分かりません。もしかしたら、何の問題もないかもしれません。」

もしそうなら、主がそれをあなたにお告げになるでしょう。」

しかし、もし偽りの心でここに来ているのなら——

数分後に何が起こるか、あなた自身が知るようになります。

——さあ、よろしいですか。

51 ですから、もしあなたが心から真実に求めているなら——そして私はあなたがそうであると信じています——あなたがイエスのもとに歩み寄ったとしたら、主はあなたと語り始められるでしょう。ちょうど今、私があなたと話しているようにです。主はこう言われるかもしれません。

「さて、婦人よ……」と。そして、井戸のそばのサマリアの女に話されたように、少し会話を交わされるでしょう。

それから、まっすぐにあなたの問題の核心に触れ、こう告げられるのです。

「あなたは罪の中にいる」

あるいは「あなたはこういうことをした」

または「あなたには腫瘍がある」

「あなたは結核を患っている」——そのように。

主はあなたの中にある問題をはっきりと示されるでしょう。

そしてあなたは言うでしょう。

「主よ、どうか私を助けてください。」

すると主は言われます。

「もしあなたが信じるなら、わたしはできる。」

あなたは言うでしょう。

「主よ、私は信じます。」

そして主は言われます。

「あなたの信仰の通りに、あなたに成れ。」

——そうでしょうか？それが主がなさった方法です。そうです、それが真理です。

52 ですから——もしイエス・キリストが「昨日も今日も、そして永遠に同じ方」であるなら、主はいまもそのしもべたちを通して、同じことをなさるのです。

それは同じイエスです。(少し音を上げてください。はい、もう少し大きく……そう、それでいいです。)あの賛美には、主の御使いが特に喜ばれる何かがあります。私は先ほどから三度か四度あの女性を見ましたが、まだ何の反応もありません。ですから——まだ「油注ぎ」がここに降ってきてはいないのです。では、あなたと私で、もう少しだけ話をしてみましょう。そうすれば、もしかすると主が私たちに語ってくださるかもしれません。

53 あなたは信じますか——イエス・キリストは「昨日も今日も、そして永遠に同じ方」であると？そして、神が私にあなたの人生のことを知らせることができると信じますか？信じますか？さて、あなたもわかっている通り、私はあなたのことを何も知りません。おそらく、これまで一度もお会いしたことがないでしょう。

私たちは互いにまったくの他人です。しかし、もし神が私にそれを示してくださるとしたら——そして、もしそうしてくださるなら——あなたは嬉しいですか？

そうすれば、それは証しになるでしょう……。——よろしいですか、皆さん。聞いてください。この女性は私にとって見知らぬ人です。私も彼女にとって見知らぬ者です。もし今夜、この一人の女性を通して神がそれをなさるなら、

それだけでこの集会全体にとって十分な証しになるはずですよ。

神がそうされるかどうかはわかりません。それは主の御手の中にあります。

しかし、もしこの女性に——(こちらを向いてください)——もしこの女性に対して聖霊が、彼女のことをたとえ一つでも明らかにされるなら、この会衆の皆さんは心からこう言うべきです。主イエスよ、ありがとうございます。私はあなたを信じます」と。

54 さて、人々はここのプラットホームにいる必要はありません。そこにいる皆さん、今は祈りのカードを持っていない皆さん、このように見て、心から信じてください。そして、ただ祈り、神にあなたを助け、あなたに信仰を与えるように頼み始めてください。

私たちがプラットホームで始める前でさえ、主の天使が来るでしょう。友よ、私はあなたに聖書の真実を話しました。私は聴衆に信仰があることを知っています。何かが発生するのを見るまで待つ必要があります...教会は今夜も満員ではないので、私たちは皆、地元の人々です。私たちはここに座って待っています。

55 私は、祈りのカードを持っていない人に祈ってほしいのです。

そうすれば、主があなたに語られるのに「カード」が必要なわけではないことが分かるでしょう。——どう思いますか、奥さん？ あなたですよ。信じますか？

……そうですね、その隣の女性が今、祈っていますね。では、彼女に話しましょう。あなた、祈っておられますね？ 青いドレスの小柄な女性。はい、そうです。

私は最初こちらの女性に話しかけようとしていたのですが……。

あなたは祈りのカードをお持ちですか？ いいえ、持っていませんね。

では、あなたは私が神の預言者であると信じますか？ 信じますね。

実のところ、あなた自身には特別な病気はありません。

けれども、あなたはここにはいない「誰か」のことを考えていますね。

それは本当ですか？ そうなら手を挙げてください。

……そうです。彼女は「複雑な問題」を抱えた女性ですね。

とても神経がすり減って、不安で、心が折れています。そうですね？

それが真実なら手を挙げてください。——中年の女性ですね。

はい、よろしい。では立ち上がってください。

もしそれが真実なら、皆さんに向かって手を振ってください。

——さあ、帰ったらその同じ手をその女性の上に置いてあげてください。

そうすれば、彼女は癒されます。

56 さあ——あなたは信じますか？ 今、聖霊がここにおられます。

こちらをご覧ください、奥さん。あなたは私が主の預言者であると信じますか？ はい。——今、わかりました。あなたの苦しみの原因は「がん」です。そうですね？(「そうです」)そのがんはかなり重い。しかもそれは「胸」にありますね。そうでしょう？(「そうです」)——右の胸に、です。(「はい、そうです」)

よろしい。主イエスの御名によって、癒されて行きなさい。

信仰を持ちなさい。……今、主の御使いがこの場におられます。信じなさい。——こんにちは、奥さん。あなたは私が神の預言者であると信じますか？

(「はい」)私がああ天使について語ったことが真実だと信じますか？

(「はい」)あなたもまた、ある人のことを思っておられますね。

—それは、あなたの息子さんです。あなたの息子さんは伝道者ですね？ そうですか？(「はい」)そして、彼はいま病院か療養所にいますね？ そうでしょう？(「そうです」)あなたは彼のことをとても心配していますね。

—神があなたを祝福されますように。天の父よ、この息子を祝福し、立ち上がらせ、癒してください。どうかこの敬虔な母をも祝福してください。

(聞き取りにくい言葉)……神を信じなさい。

57 よろしい、奥さん。あなたは信じますか？(「はい」)

神を信じますか？(「はい」)キリストが神の御子であられたと信じますか？

そして、私がおのの主の預言者であると信じますか？(「はい」)

あなたには腫瘍がありますね。(「はい、先生」)それは正しいですね？(「はい、先生」)そして、その腫瘍は耳のところ——左の耳の後ろにありますね？ そうでしょう？ここからは見えませんが、確かにそこにあります。……はい、それです。

よろしい。さあ、行きなさい。主の御名によって癒されなさい。信仰を持ちなさい。疑わずに、信じ続けなさい。

58 その袖をまくって座っている男性、あなたはどう思いますか？

私が神の預言者であると信じますか？あなたは今、涙を流していますね——それは、あなたの状態がとても悪いから。あなたは高血圧を患っていますね。そうでしょう？もし癒されなければ、あなたは間もなく脳卒中で命を落とすことになります。それはご自分でも分かっていますね？——では、今立ち上がって、あなたの癒しを受け取りなさい。神がここにおられ、群衆の中からあなたを引き出されたのです。——神があなたを祝福されますように。神があなたと共におられますように。……よろしい。そして、あなたもまた死の近くにいることを分かっていますね？あなたの病も非常に重い。あなたは最も悪い形の糖尿病を患っていますね。そうですか？(「そうです」)あなたを助けられるのは神だけです。

今夜、神をあなたの救い主、そして——いや、「癒し主」として受け入れますか？

救い主としてはすでに信じていますね。では今、癒し主として信じますか？

—ならば、イエス・キリストの御名によって、あなたが癒されますように。

疑ってはいけません。信仰を持ちなさい。信仰を天に向けなさい、兄弟よ。

さあ、体をまっすぐにし、完全に健康になった者として歩きなさい。

—ハレルヤ！

59 あなたは信じますか？——その端に座っている男性、あなたは脱腸を患っていますね？ そうでしょう？怖がらなくていいですよ、姉妹。私はあなたが彼のために祈っているのを見ました。私はあなたを知りませんし、会ったこともありません。けれども、それは真実です。——そうです。そして、そのすぐ後ろに座っている小柄な男性——あなたには強い恐れがありますね。とても神経質で、不安に満ちています。さらに、前立腺の病気を患っていますね。

それが真実であること、あなたも分かっています。

——では、あなたも今、癒しを受け取りたいですか？

よろしい、兄弟。

主があなたを祝福されますように。

神があなたを祝福されますように。

神があなたを祝福されますように。

60 さあ、こちらへどうぞ、兄弟。

あなたは信じますか?—ええ、私はあなたの中に誠実な心を感じます。

あなたは私が神の預言者であると信じますか?

私はあなたに会ったことも、名前を聞いたこともありません。

けれども、あなたがここに来たのは自分のためではありませんね。

—その赤ちゃんのためですね? («はい»)

その赤ちゃんは、腫瘍のために手術を受けたことがあります。

そして今、もうひとつの腫瘍がありますね。

それは口の中、あごのあたりにあります。そうですね? («そうです»)

それに、あなたは最近、誰かと手紙のやりとりをしていましたね? («はい、先生») そうですね? («ドクター・トービンです») その通りです。ええ。

そして、あなたはそのドクターに勧められて、この集会に来て赤ちゃんの手術について導きを受けようとしたのですね。兄弟、私はあなたの心を読んでいるわけではありません。神の御霊がここにおられるのです。

—天と地の創造主なる神よ、この赤ちゃんとこの男性を祝福してください。

(聞き取りにくい言葉)

どうか手術が成功し、この子が完全に正常になりますように。

イエス・キリストの御名によって。アーメン。

神に信仰を持ちなさい。あなた方の誰しものが、今すぐ信じるべきなのです。神を信じなさい。疑ってはいけない。

61 信仰を持って来なさい、奥さん。その胃の病気から癒されたいのですよね?

—では、好きなものを食べなさい。それを信じますか? よろしい、ではそうしなさい。……どこかあのあたりに、小さな女の子がいますね。私は見えます—二人の小さな女の子が私の前に立っています。彼女たちは喉に問題があります。扁桃腺か、何かそのような病です。ここに見えているのですが、どこにいるのか正確には分かりません。誰かのそばにいるようです……。—ああ、いました。そうです、その二人の子どもです。お母さん、恐れることはありません。

聖霊が今、ここにおられます。(聞き取りにくい部分)

—あなたは癒されたいですか?では立ち上がり、イエス・キリストの御名によってあなたの癒しを受け取りなさい。(聞き取りにくい部分)—それでよいのです。これこそ、昔ながらのペンテコステの集会です。

62 その男性、立ち上がりなさい。神が、あなたの膀胱の病を癒しておられます。

—その列の一番後ろに座っているあなたです。その膀胱の不調を治したいと思いませんか?もしそうなら、今すぐ立ち上がり、あなたの癒しを受け取りなさい。イエス・キリストがあなたを癒されます。—どうですか?

この中で、今、癒されたい人はどれくらいいますか?



www.messagehub.info

説教の語り手

ウィリアム・マリオン・ブラナム

"...第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される。" 黙示録 10:7